

「球跡巡り」 第39回

プラタナスの木に囲まれた美しい野球場 美吉野野球場

令和3年(2021)2月26日 / 令和5年(2023)1月26日書籍発行 ID111367107

奈良県吉野町に大正末期に野球場のほか、陸上競技場、庭球場、相撲場、シャワー室に選手控室など、国内屈指の施設を備えた「美吉野運動競技場」がありました。

大正15年(1926)、桜の季節以外でも乗客を呼べる沿線施設として建設しました。中でも、陸上競技場は日本陸上競技連盟の公認を受けた立派な施設で、“暁の超特急”と言われた吉岡隆徳が走り、アムステルダム五輪で日本人初の金メダリストになった織田幹雄が三段跳びを披露しました。他にも南部忠平、人見絹枝など、多くのオリンピックが足跡を残しています。

野球場は周囲にプラタナスの木が植えられ、美しい景観でした。収容人数千人と小さいでしたが、当時は未だ施設自体が希少で、甲子園球場も二年前に完成したばかりでした。

陸上競技場などは昭和14年(1939)ごろから貯木場に転用されたが、野球場は残っていました。プロ野球開催はニリーグ制になった昭和25年(1950)でした。吉野木材協同組合連合会が、野球場の大改修を行い、その球場開きとして連合会が5月19日 阪急対東急、近鉄対南海の変則ダブルヘッダーを主催したのです。

2年後の昭和27年(1952)8月には近鉄対南海のダブルヘッダーが行われました。その後 昭和34年(1959)9月の伊勢湾台風により吉野川の河川改修工事で川幅が広げられ、1960年代後半に野球場は取り壊されました。

伊勢湾台風を機に整備された球場跡地近くの道路には、大きく成長したプラタナスの木があり、その傍らに「美吉野グラウンド跡とプラタナス」と題した解説板がありました。

今でこそスポーツ複合施設は珍しくありませんが、100年近く前の大正から昭和にかけて、緑濃い吉野の里に最先端のスタジアムがあったこと自体が驚きです。その史実を語り継ぐためにも、当時から残るプラタナスの木を永遠に守ってほしいと思います。

(ホームページより抜粋)



昭和29年(1954)ごろの野球場。球場左手に写る貯木場が陸上競技場だった。

写真提供：NKTk



美吉野運動場選手控室

大正15年(1926)、完成当時の野球場と選手控室  
写真提供：成瀬匡章氏